

平成30年度 第3回 安曇野市まちづくり推進会議ワーキンググループ 会議概要

- |   |           |  |
|---|-----------|--|
| 1 | 会議名       | 平成30年度 第3回安曇野市まちづくり推進会議ワーキンググループ   |
| 2 | 日時        | 平成30年10月10日(水) 午後1時30分から午後3時45分まで  |
| 3 | 会場        | 本庁舎 3階 共用会議室306(全体・福祉)、会議室302(安全・安心)   |
| 4 | 出席者       | 熊井副会長、大澤(克)副会長、増田委員、青柳委員、海老原委員、飯沼委員(三澤委員代理)、小澤委員、玉井委員、梶山委員(望月委員代理)、片岡委員、小口委員、重野委員、大澤(慶)委員、大神委員、長崎委員、栗原委員 |
| 5 | 担当課出席者    | 宮澤市民生活部長、小林地域づくり課長、地域づくり課 山田補佐、青柳係長、金子主査、小笠原主任、坂口主任、奥谷主任、土屋地域おこし協力隊、長寿社会課 田崎副主幹、子ども支援課 鳥羽課長、介護保険課 岩原主査   |
| 6 | 公開・非公開の別  | 公開   |
| 7 | 傍聴人       | 0人 記者 0人   |
| 8 | 会議概要作成年月日 | 平成30年10月18日  |

協 議 事 項 等

1 開会(進行:地域づくり課長)

2 あいさつ

(副会長) ※会長欠席

- ・安曇野市の安全・安心な、住み良いまちづくりのため、このワーキンググループが少しでも力になればと思う。課題も詰まってきている。課題解決のため、皆様のご協力をいただきたい。

3 前回の振り返り

※事務局より説明

4 ワーキンググループ

【福祉グループ】

(参加者)

熊井副会長、大澤(克)副会長、増田委員、青柳委員、海老原委員、飯沼委員(三澤委員代理)、小澤委員、玉井委員、梶山委員(望月委員代理)、片岡委員、小口委員、重野委員、大澤(慶)委員、長寿社会課 田崎副主幹、子ども支援課 鳥羽課長、介護保険課 岩原主査、事務局 宮澤市民生活部長、地域づくり課 山田課長補佐、金子主査、奥谷主任、土屋地域おこし協力隊

## (1) 「見守り、支え合い、助け合い」の課題に対する対応の検討

### 《障がい者が高齢化、重度化し、その親が無くなった場合にどうするか》

#### (事務局)

- ・孤独となった障がい者に対する具体的な取り組みや、今後どうしていったらよいかという点でご意見をいただきたい。

#### (委員)

- ・施設入所から地域のグループホーム等での生活へという国の方向性の中で、現状ではグループホーム等に空きが無くて入所できないケースも多く受け皿にはなり切れていない。特に障がいの重い方は一人暮らしが難しい。支えていく施設や制度を整える必要がある。施設も増えてきているので、事業所では意識が高まっているように思う。
- ・当事業所では、将来的に重い障がいを持った方を受け入れられるグループホームを視野に入れながら事業展開を考えているが、実際には人材配置など費用的に厳しい部分もある。
- ・施設に入れるまで、地域でどう支えられるかというところが大切。障がい者の働く場所は増えてきているが、生活介護の事業所は、安曇野市では足りていないと感じる。また、日中の受け皿は月曜日から金曜日まで。土日や夜間はどのようにするのか課題と思われる。
- ・国の制度では支えきれない方を地域の中で支えていく仕組みをつくらないと厳しいと感じる。
- ・障がいとして認知が乏しい発達障がいの方やサービスを受けるために必要な障害者手帳の取得を拒む家庭もあり、重い障がいだけでなくそういった方たちも将来が不安ではないかと思われる。
- ・障がいの程度に関わらず、親が元気なうちにグループホームなどでの生活を体験しておくなど、親が介護できない状況になったら施設等へスムーズに移行できるようにしておくことが大切。

#### (委員)

- ・緊急時の支援体制にも重なる部分だが、国の方針としても地域生活支援拠点として、緊急時や親の高齢化や死亡、自身の高齢化重度化した後、本人が暮らしたいところで安心して生活ができるための仕組みづくりを進めている。
- ・松本圏域では親が入院や外出する必要があった際、一人でいることが困難となる人も地域で暮らし続けることができるように緊急の時に対応できるショートステイや緊急時に連絡したら駆けつけられる仕組みを検討している。
- ・1箇所ですhortステイを受け入れるのではなく、複数のショートステイで連携できる面的整備を考えている。しかし、人材がそろわないという課題がある。
- ・発達障がいやこだわりの行動、二次障がいによる行動障がいがある方の受け入れ先がなかなか見つからない。緊急に対応する場合、きちんとしたスキルを持った対応が必要になる。
- ・将来を見越して親に準備してもらうのが大前提だが、同時にそういったことが難しかった方の支援を考えなくてはいけない。圏域全体でのスキルアップ、人材育成が必要と思われる。
- ・早期発見、早期療育により、早期に支援者が入って将来に向けて共に考えられる仕組みが必要。

#### (委員)

- ・障がい者に関わらず同じ課題を持った人たち（当事者）の位置づけを構造化の中に見える化していてもよいのではないか。サービスや支援の対象として位置づけられているが、当事者こそ協働のまちづくりの支え合い助け合いの仕組みの主体となるべき。

### 《心のバリアフリー化：全ての人が平等に社会参加できるようにするためにどうするか》

#### (委員)

- ・認知症の方が地域に帰っても生活ができるよう何ができるか考え、認知症を支える家族やその家族を支える地域の人達が認知症を理解しサポーターになってもらえるよう講座を開催している。

- ・認知症の人もその家族も暮らしやすい地域は、認知症の人にだけやさしいのではない。それはお互いを理解してより助け合える地域づくりにつながると考えている。介護支援事業所の専門性を活かし、認知症を切り口に「困ったときはお互い様」の地域づくりに取り組んでいる。どの事業所も切り口は違えども同じ目的をもって活動に取り組んでいると思う。

**(事務局)**

- ・福祉グループの根幹は、それぞれ切り口は異なっても目指している所は同じということ。

**(委員)**

- ・活動の形は違っても、根幹は地域で生きている人が幸せに暮らせることだと考える。当事業所は介護を専門とした事業所だが、地域で相続の勉強会を実施している。関心をもってもらうためにテーマはエンディングノートという切り口でPRしているが、目指すところは皆さんと同じ。

**《緊急時の支援体制：日常的な体制整備、いざという時に動ける体制とは》**

**(事務局)**

- ・緊急時の支援体制について障がい者、高齢者等含め、全ての皆さんに対してのご意見を伺いたい。

**(委員)**

- ・区では障がい者への認識は薄いので、障がい者に対していざという時、どうい支援ができるか具体的に考えなくてはいけない。
- ・防災訓練に参加する障がい者は一部であるため、区から呼びかける必要もあると思う。

**(委員)**

- ・障がい者の家庭は、地域との関わりを持ちたがらないことが多い。
- ・見守り訪問では世間話をしながら関係づくりに取り組んでいるが、障がい者の家庭では障がいについての話をしたがない。地域との関わりを持ちコミュニケーションできる仕組みが必要。

**(委員)**

- ・当区の中にグループホームがあるが、その存在を知らずつながりがなかった。最初のきっかけとして、まずは区で障がい者の状況等を把握して連携につなげる必要があると感じる。
- ・事業所では運営推進会議を行っており、そこで初めてつながる機会となる。

**(事務局)**

- ・緊急時の支援体制といっても結局日常的なつながりをどうするかということにつながる。事業所や民生児童委員などが参加している運営推進会議について担当課から説明をしてほしい。

**(介護保険課)**

- ・介護保険制度の中で事業所が地域とつながれるように事業内容を明らかにするために、地域密着型という市が指定している事業所については、年に数回、区長や民生児童委員などを含め話し合いをしている。

**(事務局)**

- ・そこでの地域とのつながりは大きいと思われる。83区の内関わっている区はどのくらいか。

**(介護保険課)**

- ・事業所が豊科や穂高に集中していることもあり、まちまちである。

**(委員)**

- ・障がいを持っていることを周囲に言えるようになったのは最近のこと。
- ・障がい者のご家族には、周囲に理解してほしい、助けてほしいと思っても、助けてもらうばかりで申し訳なさも感じている。心のバリアフリー化は本当に大切。
- ・障がい者もその家族も色々な思いをもって生きている中で、事業所としてはそこに携わる者として何かしなくてはいけないし、地域でも理解を高めみんなで生きていく仕組みづくりが必要。
- ・ある区の防災訓練に参加した時、昼間、若い世代がいないということだった。その状況で大きな災害が発生した場合、当施設は助けてもらう側と思われがちだが、施設には障がいでも若く動け

る人がいることから逆に助ける側にまわれることもあるのではないかと感じた。

- ・障がいを持った方でもできることはたくさんある。一緒になって地域の中でできることをやっていくことが大切。そこからつながりが生まれ理解につながると思う。

(事務局)

- ・基本的には日常的なつながりが大切で、区は老若男女障がいの有無関係なしに同じ仲間という意識を持つことが地域づくりであり、心のバリアフリーにつながると思った。

#### 《地域の支援者をどのように発掘・育成・確保するか》

(事務局)

- ・障がい者だけに限らず、支援する人をどのように発掘するのか、育成するのか、確保するのかという課題があるがいかがか。

(委員)

- ・隣近所など一番身近な人たちが、障がいを持つ人がいることをまずは理解することが大事。しかし、障がいについてクリアに気持ちを出せるような環境づくりが必要。

(委員)

- ・障がい者といっても様々な障がいがあって対応の仕方が違う。施設等の専門家がいれば対応できるが、地域で具体的な対応ができるかは非常に難しい。

(委員)

- ・人材バンクのような話になるが、地域に障がい者の支援ができる方など、区の相談相手となってアドバイスをもらえるような方がいると思う。

(事務局)

- ・認知症サポーター養成講座等を受講された皆さんはどのような感じか。

(委員)

- ・学んだり資格を取得したりというみんな引っ込んでしまう。でも、何かあったとき何ができるかこの方にはどこまで支援が必要なのかを区の中で明確に出来ると良い。

(事務局)

- ・専門性も大切だができることをできる人がやり、多くの方で支えることが大切ということだった。

(委員)

- ・今おせっかいが必要ではないかと感じている。近所の方が世話を焼く中で、支援機関を紹介されたりすることが沢山ある。隠したがる方も多いが、周囲の声掛けやおせっかいが必要。

(委員)

- ・民生委員として活動する中で、いかに当該者を把握するかということが課題。
- ・毎年、一定以上の年齢の方や障がいをもった方に緊急時に支援が必要か問い合わせをして、支援が必要と回答した人に対しては、民生委員、区、警察などに支援を求めている人の情報を出している。この情報をもとに、調査や担当エリアの対象者のケアをしている。
- ・情報を出さない人については何の情報もなく、隣組長などからもらうしかない。おせっかいも大事だが法の壁もあるとそれ以上に踏み込めずに難しい。
- ・日頃からの支え合いができる関係であれば、進めていける。

#### 《障がい者の方も参加できる避難訓練の工夫》

(事務局)

- ・障がいを一括りには出来ないが、防災訓練の工夫についてはいかがか。

(委員)

- ・一つひとつ必要なことをそろえることが大切。介護保険の事業所として、障がい等の他分野の話をお聴くと色々と知らないことも多い。事業所にはできる事や資源がある。これが必要ということ

をみんなでそろえればいい。

(委員)

- ・どこにどのような障がいを持った方がいるかがわからないと準備のしようがない。これがあれば大丈夫というものはない。自分たちの地域にどんな方がいるかを把握し、障がいの種別に関わらず対象者との人間関係ができてることが重要。
- ・支援を拒むに至る背景はどのようなものなのか時間をかけて原因を解きほぐしていくこと、近所に信頼できる人が一人でもできれば変わってくると思う。

(委員)

- ・防災マップに避難誘導のポイントについての記載がある。様々な障がいの方に対応する訓練を取り入れ区民に知ってもらい、体験してもらうことが必要と感じる。

(委員)

- ・区内にあるサービス付き高齢者住宅の職員から、宿直が少なく災害が起きた時は区へ支援を依頼されたが、実際には難しいのではないかと思われる。

#### 《サービス事業所の不足について》

(事務局)

- ・事業所の数が不足しているということについて、その辺りの実感について伺いたい。

(介護保険課)

- ・介護については、ある程度そろっているという認識でいる。

(委員)

- ・生活介護や相談支援体制、緊急時にショートステイする場所も不足している。本当に家族が頑張っているのだと感じる。
- ・どこも財政が厳しいが、行政で独自の対策をしているところもある。「指定一般相談支援事業所」と言って、長期入院していた方がグループホームなど地域で暮らすに当たっての相談支援や、独り暮らしになった時に一定の期間、緊急時に電話対応したり駆けつけたりするサービスを行っているが、例えば名古屋市では1つ開設すると大きな助成金がでる。金銭的な制約により議論が進まないで、補助金等行政の支援がありがたい。一方、補助金を受けるに当たっては税金を有効に活用するためにもきちんとした人材配置、またそのための人材育成も必要。

(委員)

- ・平成30年4月の介護保険の改正の中で、共生型と言うが、障がい者が65歳以上となった場合に障がい者で認可を受けている施設でも同じ施設で介護保険サービスが行えるようになった。
- ・社会資源として地域密着型の介護保険デイサービスは多く地域にも根ざしていることから、認可を受ければ障がい者を受け入れる材料になるのではないかと思ひ、市の介護保険施設連絡協議会の部会で何ができるのか考えるため勉強会を行う予定。

#### 《地域で自立していくための地域活動について》

(事務局)

- ・自立支援について、地域ではどういう活動をしていくべきか。

(委員)

- ・地区社協の活動は各々で計画しているが、全体的な活動にはつながってはいない。全体としてどうするかは考えていかななくてはいけないが、定まっていない。
- ・浅く広く地域住民の困りごとについて、受け取っていくことが地区社協の本来の姿なので、これに基づいて活動していくのだと考えている。

(委員)

- ・社協の障がい者就労継続支援事業という事業の中で、一般就労をして趣味で音楽活動をしている

方がいて一緒に楽団で活動をしている。障がいがあってもその人のできる力をどこで活かせるかということ、本人だけではなく、サポートする側のネットワークの力が一人の人生を底上げすると感じている。

- ・その方のように自分の力を活かして活動できる人生とそうでない人生では大きく異なると思うが、そこにつなげた周りのサポートが大きいと思う。

(委員)

- ・今月グループホームを新設するが、そこでは入所者も地域の一人と位置づけ、ごみ当番や地域の行事には出ることを説明している。こういうことをきっかけとして、アパート等で普通に生活しているような状況をできるだけ創り出すことで自立につながればと考えている。

(委員)

- ・市内にグループホームはどのくらいあるのか。

(事務局)

- ・調べておく。

(委員)

- ・先ほどの楽団の話のように、障がい者などが、自分でも挑戦したいという気持ちを発揮できる機会をつくることができるのかどうか。それが自立支援につながるのではないかな。

#### 《事業所間及び事業所と行政の連携について》

(事務局)

- ・事業所と行政の連携はあるか。

(委員)

- ・市との連携は特にないが、出前講座などは利用している。3歳までの子育てが人としての基礎作りなので、市と協力しながらやっていきたい。

(委員)

- ・オレンジカフェの取り組みを市内で広げるに当たり、事業所では初めての取り組みで不安もあったが、市の介護保険課にコーディネートしていただき、連絡会を開催していただき助かった。
- ・資金が足りないということがオレンジカフェを開催している共通の課題だったため、補助金を設けてもらった。

(委員)

- ・障がい者福祉の中で、できないことをできるように努力するのではなく、持っている力を使ってできることはやって、できないところはサポートを受けながら自分たちが望んでいる生活を営めるようになることが障がい者の自立であると考えられる。
- ・働くことはお金を稼ぐことが目的ではなく稼いだお金で何をすることが目的。その先にあるものが大切。そういったつながりの中で人生があるはずなので、その先まで含めて自分がやりたいことを支えられる社会でなくては自立は無いと思う。誰かだけ支えればいいのではなくて、地域にいるすべての人が関わったり様々な主体がつながることで障がい者の自立が支えられると思う。
- ・行政や事業所のみならず、企業や市民団体との連携がいかに広くつながっていくかが自立につながると思う。

(委員)

- ・楽団活動をしている中で、障がいを持った方が他の団員の迷惑となる行動をとることがある。それに対し怒り出す団員もいるが、みんなで一緒に音楽を作っているということが浸透してきていると感じている。関わることで誤解がなくなったり理解されたりすることがある。専門家だけではなく、障がいを持つ方とも同じ舞台上で関われる場をもつことも大切。

(委員)

- ・企業では障がい者を一定数雇用することになっている。しかし、企業では限られた障がいの方し

か雇用ができず確保が難しい。企業として施設で働いている障がい者を支援した人数もカウントできるように改正はされないものかと思う。

#### 《引きこもりの支援者の養成ができているか》

(事務局)

・引きこもりについて、支援者の養成はできているのか。

(委員)

・県からの補助金により人材育成に充てているが、年間1人の育成には足りない。経験が必要なので3年くらいはかかる。金銭的な面では厳しい状況。

(事務局)

・地域や区では、支援者はいるか。

(委員)

・今のところいない。

(事務局)

・地域に資格保有者とかではなくても、支援者がいれば変わってくるか。

(委員)

・事業者へつなげてくれる人がいればありがたい。  
・おせっかいも、最近うまくいっているのは、大豆の選別の内職作業について対象者にピンポイントで募集したら、良いきっかけとなりコミュニケーションの機会となった。

(委員)

・市では小中学生の不登校対策を重要な事項としてとらえているが、つなぎ先が分からないという共通認識がある。地域で気軽に立ち寄れる居場所が必要と思われる。

#### 《引きこもりの方を地域でどう受け止めたらよいか》

(事務局)

・引きこもりの関係は、地域に溶け込めないという課題があって、地域でどうやって受け止めたらよいか。

(委員)

・家庭で隠している部分があって、そういったところに入り込むにはどうしたらよいか課題。困っていないと声をかけられない。先ほどの大豆の選別作業は、お金に困っているだろうという予想をたてて呼びかけた。民生委員とも話をするが発掘は難しい。

(委員)

・我が家では事業をしていて、引きこもりの人や障がいを持った人に、家族と話し合っ普通給与を支払い仕事についていただいたことがある。だいぶ変わられたと感じたので、家族の応援や、地域で仕事をしてみたらどうかなど、積極的に声をかけてあげることが大切と感じた。

#### 《福祉と企業と農家等とのつながりについて》

(事務局)

・福祉と企業と農家のつながりが薄いことだと思われるがいかがか。

(委員)

・大豆の選別の作業は、企業とのつながりの中でできたことである。  
・わさび畑の耕作放棄地を当事業所で開拓した。その中で、外で泥遊びをしませんかというような誘いで引きこもりや登校拒否の方たちに声をかけ参加してもらい作業した。

(委員)

・近所に空家を借り、認知症カフェや体操教室を行っているが、空家に畑もある。昨年の支え合い

フォーラムの中で発表したところ、無農薬で農業を行う活動をしている方から声がかかり、その方の協力を得て無農薬での農業を利用者で行うこととなった。地域の人とのつながりもできたし、空家の活用もできた。いろいろつながったことにより地域に貢献できた。

#### 《待機児童の現状と対応について》

(事務局)

- ・待機児童について、子ども支援課から説明をお願いしたい。

(子ども支援課)

- ・隠れ待機児童といって、要件に関係なくとにかく入れたい場合や預けたい施設が特定している場合の児童を含めると約 80 名程度いる。その内、親が働きに出なくてはいけないのに子どもを預ける先が無い場合が 3 歳未満児 (0~2 歳児) に限り、平成 30 年 4 月 1 日現在 7 名発生した。
- ・3 歳未満児を預ける小規模保育事業所が民間で本年度 2 園整備、さらにたつみ認定こども園の改修により平成 31 年度からは未満児の受け入れ約 44 名の増員が見込まれる。また平成 31 年度中には明科認定子ども園の改修により、さらに約 18 名の増員が見込まれる予定である。
- ・保育士がいれば受け入れられる施設もあるが、人材の確保が難しくなっている。
- ・子どもの数は減っているが、3 歳未満児保育の希望者は増えている。3 歳以上児はほとんど受け入れられている。

#### 《親に対する教育について》

(事務局)

- ・親に対する教育についてはいかがか。

(委員)

- ・親の教育というよりも、親が子どもを抱きしめることが大切。愛情を表現することで、子どもは満たされ生きていて嬉しいということになる。未就園児の時に愛情を受け入れた子どもは健全に成長すると考えている。しっかりと抱きしめてあげて欲しい。

(事務局)

- ・認定こども園では両親を含めた教育としてどのようなことをしているのか。

(子ども支援課)

- ・基本的には子どもへの関わり方や発達障がいを持つお子さんへの接し方について、園長講話や懇談会や個別の相談において行っている。
- ・現在の親は子育て能力が十分でない方もいるので、子どもへの接し方や愛情を注ぐように様々な機会を通じ伝えている。

#### 《認定子ども園と地域とのつながりについて》

(事務局)

- ・認定こども園と地域のつながりについてはどうか。

(子ども支援課)

- ・認定こども園で行う行事には、地域の方に来ていただくようにしている。文化的交流を地域で行っていたり園で行ってきたことについては、継続して行っている。自然保育について、近所の農地を借りたり畑作業を手伝わせていただいたりしている。
- ・区長へのお声掛けは、区の事業等多忙なことからもあまり積極的に行っていない。

(委員)

- ・地域との関わりは難しい。子どもは地域の宝として地域の人がもっと子どもと関わって楽しくやっといこうと理解していただければよいが、足踏みしている様子も伺える。

(委員)

- ・小学校以降は、行事も含め地域とのつながりがある。それよりも前だと民生児童委員さんが関わるくらいで地域とのつながりは少ない。防災も含めどう関わっていくか今後考える必要がある。

(委員)

- ・地域の方々にイベントの年間計画を渡し、シニアの方たちにイベントの際に手伝ってほしいことをお願いすることで、少しずつ関わりを広げている。

(委員)

- ・「こんにちは赤ちゃん運動」を推進してほしい。
- ・赤ちゃんが生まれた時に民生児童委員がお宅を訪問し声をかけることで、親とも話ができるし、どこにお子さんがいらっしゃるのかもわかる。男性の民生委員は尻込みされる方もいるかと思うが、そこは男親として関わってもらえたら良いと思う。

《母子、子育て相談窓口へ気軽に行くには》

(事務局)

- ・母子相談窓口について行政から説明をお願いしたい。

(子ども支援課)

- ・本庁舎1階の健康推進課の窓口のところにある。子育て世代包括支援センターという正式名称があるとおり、妊娠期から途切れのない子育て一括支援を行うもの。
- ・母子手帳を交付に来たときに困っていることなどを聞き、問題等があれば関係課につないでいる。市では色々な相談窓口があり、どこで相談に行っても必要な窓口につながるようなシステムを構築している。出来る限り色々なところで拾える様にしているのが市のスタンス。

(委員)

- ・若いお母さん方は行政を堅苦しく感じてしまうので、子どものおもちゃがあつたり明るい雰囲気だったり、気軽に行ける環境作りが望まれる。

(委員)

- ・検診を何回も受けない人へ声掛けするなど相談窓口に来られない人への支援はあるのか。

(子ども支援課)

- ・「こんにちは赤ちゃん運動」は無いが、新生児訪問は必ずある。子どもが生まれたことが分かれば保健師が必ず訪問している。その段階で何か発見があれば、各所につないでいる。
- ・来れない方を把握するのは難しいが、相談窓口はいくつもあり、どこかで察知できたら必要なところへつなげられるような仕組みはできている。

《世代間交流について》

(事務局)

- ・世代間交流については、どうか。

(委員)

- ・初めてイベントに参加した高齢者の中には、最初は良い顔をされない方もいますが、子どもと交流し帰るときには皆笑顔になっている。世代交流の必要性を強く感じます、

(委員)

- ・児童館とボランティアセンターが一体となった施設のメリットを活かし、世代間交流を仕掛けている。
- ・ファミリーサポート事業の中で、高齢者に支援者(会員)になってもらっている。利用する若い親と高齢者の支援者の間で交流が図られ地域ぐるみの子育てを促している。

### 《孤立する母親の不安を減らすには》

#### (事務局)

- ・孤立しているお母さん等、子育てに不安を持っている方への対応についていかがか。

#### (委員)

- ・二人目の子どもを出産した母親には最初の子が赤ちゃん返りをして悩んでいる方が多い。
- ・未就園児に関わる子育ての講演会を開催してほしい。母親が来やすいように市役所ではなく、小規模で構わないので、様々なところでたくさん開催し、母親が自信をもって子育てできるようにしてほしい。いくつになっても子育てはし直すことができる。

#### (委員)

- ・子育てで大切なのは、親が叱るときに何が悪いのか子どもにわかるように叱っているということを選別できる教育が大切。今の若い親には良いと思う。

### 《福祉員の理解を高めるためには》

#### (事務局)

- ・福祉員についていかがか。

#### (委員)

- ・時間をかけて多くの人が福祉員に触れていくことが大切。一人の人が役を長くやることは負担になり、担い手がなくなってしまう。1年交代でいいので、多くの人が福祉委員を経験することの積み重ねが大切。支所をとおし各地区で説明会を行い啓発している。

#### (委員)

- ・福祉員の名前を普及させようとしているのではなく、老若男女障がいの有無を含めた隣近所の緩やかで自然なつながりの再構築をつくるのが目的。
- ・緩やかな関係が確立し、福祉員という言葉が必要なくなる地域ができることが理想。

#### (委員)

- ・民生委員の立場から見ると進んでいると感じる。

#### (委員)

- ・区で、部制度への取り組みが進んでいるところだが、地区社協などいろいろな団体がありそれぞれ独自の組織で事業を行っている。地域の活動は区の活動に集約し、できるだけシンプルな形で地域の皆さんがお互いに分担し合って活動する方向でまとまっていけたらと思う。

#### (事務局)

- ・福祉員は隣組長がなっているところがほとんどと思われる。コミュニティマニュアルにもあるが、福祉員に責任を持たせるのではなく、一番は経験することで地域を知りお互いに助け合えるようになればよいもので、最終的には言葉が必要なくなることが理想ということだった。これは全てに共通していることだと思う。

## (2)閉会

#### (事務局)

- ・これまで2回にわたり、全市的な課題と解決策について議論をいただいた。不十分な点もあろうかと思うが一度ここまでで整理していきたい。取り組みの濃淡などを見ながら全体の議論をしていただくとともに、最終的には区から提起された課題のため、市全体の仕組みの中で区の役割を考えていただきたい。

## 【安全・安心グループ】

### (参加者)

長崎委員、栗原委員、地域づくり課 生活安全係 青柳係長、花岡主査、事務局 地域づくり課 小林課長、小笠原主任、坂口主任

### (1)市等による「見守り合う制度等仕組み」

※全市的な交通安全の取り組みについて説明。

#### (事務局)

- ・全市的な交通安全活動を表にまとめたので全市的な取り組みの中で、どういったものが不足していてどういったものが足りているのか確認し、今後の取り組みについて検討したい。
- ・頻度が多いから良いというものではない。対象人数が限られている場合もある。各区での取り組みは、区内に限られた活動になってしまう。全市的なものを検討したい。表について意見があればいただきたい。
- ・意見がないようなのでこういったことで良いか。交通安全は高齢者の事故が多いこと、高校生の自転車事故が多いことを踏まえて、そのあたりの取り組みに力を入れていかなければならない。
- ・高齢者の交通安全教室は人が集まらない現状がある。市としては各戸訪問をして啓発チラシを配っている。人が集まらないといった点ではいかがか。

#### (委員)

- ・交通安全教室は幼稚園、保育園保護者、小学生、中学生を対象にやっている。あとは高齢者をどうするか。また、高校生まで自転車に乗らない子もいる。そういった子は危ない。自転車保険にはいることも大事。

#### (事務局)

- ・保険については知らない人が多い。

#### (委員)

- ・なかなか学生相手に保険の話はできない。補助金を出すことも検討してはいかがか。

#### (委員)

- ・高校生は市外の方もいるから難しい。

#### (委員)

- ・小中学生は充実しているが、高齢者はなかなか集まらない。
- ・市が主催している教習所で行う体験型交通安全教室は好評だと聞く。

#### (生活安全係)

- ・市から各区にお声がけをしているが、声をかけてもなかなか集まらないことが課題。高齢者にどうやって興味を持ってもらうか、地域とも協力していくことを考えている。

#### (委員)

- ・区長会として安全安心の推進をお願いすることはできないか。

#### (委員)

- ・全区が取り組むかどうかは別だが、体験型教室があることの話はできる。区には、元気で動ける高齢者の会もある。そういったところとも協力を頼むと良い。

#### (生活安全係)

- ・開催回数に限りがあるので、事故状況を勘案して、各区にお声がけをしている。

#### (委員)

- ・ある程度地域を分けて、声をかけてもらえば、区長会としても呼びかけをしやすい。

#### (生活安全係)

- ・今年度は、大字単位でお声がけをした。各区が各団体とつながりながら安全安心活動の底上げを

できるようお手伝いしていきたい。

(委員)

- ・事故があると関心が高まる傾向にある。

(事務局)

- ・交通安全教室も知っている人と知らない人がいる。また、区長が代われれば継続性を保てない場合がある。

(委員)

- ・全市的な取り組みを検討していかなければならない。

(委員)

- ・30~40人くらいのお互いにコミュニケーションが取れる範囲で開催することが望ましい。

(生活安全係)

- ・地域同士のコミュニケーションを大切にしていきたい。地域の力をお借りして活動を広げていきたい。

(委員)

- ・みんなが集まって、簡単にできることを検討したい。
- ・防災訓練を先日行った。まじめな内容だけでなく、体操なども行った。そういった工夫が必要だ。

(事務局)

- ・ある区では、人が集まる機会にほかの事業を抱き合わせでやっていると聞く。

(委員)

- ・防災会長を中心に中学生との防災訓練を行った。防災会長の話をクイズ形式にしたことで、中学生も楽しんでもらえたようだ。

(生活安全係)

- ・高齢者を対象にする事業の難しい点は、学生と違い、一堂に集まる機会が少ないことである。口コミで広げていくことも大切である。そのためには、内容の工夫が必要であると思う。

(委員)

- ・啓発グッズも内容が固いことが多いように思う。

(事務局)

- ・区のイベント情報も市は持っていないし、区長から依頼があればチラシなどを提供することもできる。

(委員)

- ・どこの区でも敬老会は開催していると思う。敬老会には多くの方が集まるが、元気に活動できる高齢者は限られている。コミュニティに入れられない方もいるように思う。

(委員)

- ・当区は小さい区なので、だいたいの方の顔がわかる。

(委員)

- ・顔のわからない方が多くなってきているので、そういう方へのアプローチが課題である。

(委員)

- ・小中学生には交通安全教室等を実施しているので、高齢者の関係をどうするか。

(生活安全係)

- ・中高生と高齢者の事故が多い。

(委員)

- ・原因は高齢者とは限らない。

(事務局)

- ・中高生と高齢者を手厚くしていかなければならない。

(委員)

- ・シートベルト調査では、98～99%徹底されている。しかしチャイルドシートは普及が少ない。

(生活安全係)

- ・警察、市は市民一人ひとりが対象である。コミュニティ外の人ともつながることが最終的には、安全安心や防災につながっていく。今ある団体の活動を活かすことはできないか。市としても各種団体とは連携していき、地域のお力を借りたい。

(委員)

- ・区では、人を集めることは長けているのではないか。区として交通安全教室などに参加していくことはできるのではないか。

(生活安全係)

- ・全市的にみると全ての方に啓発が行き届いているわけではないので、連携を図っていくことを検討したい。

(委員)

- ・防犯の関係では、人が足りないといったことを警察の方に聞いた。各区で防犯組織があれば人を集めやすいと言っていた。

(事務局)

- ・資料を見て各団体が連携をとれているかなど、意見があればお出しいただきたい。学校関係の活動は多いが、一般の方や高齢者への活動が少ないことがわかる。

(委員)

- ・交通安全については十分ではないか。これ以上何をするのか。

(事務局)

- ・イベントに合わせてやる意見もあったが。

(委員)

- ・敬老会に合わせてやることはできそう。これまで、交通安全を中心にやっていたが、今回は防犯のDVDを見る機会があった。防犯については昔と今では大きく内容が違って驚いた。そういった気づきも必要である。

(委員)

- ・まずは啓発活動が肝心。目で見て聞くことは大事である。解決策がすぐあるわけではないので、地道にやっていくことが大切である。

(事務局)

- ・安全安心には防犯や交通安全だけでなく、防災訓練がある。

(委員)

- ・防災訓練は参加者が多いので、その機会を使えば交通安全も防犯もできる。

(事務局)

- ・防災訓練もやっではいるもののいざという時に本当に対応できるのか疑問がある。

(委員)

- ・安全安心部となったから、交通安全、防犯、防災を兼ねて事業を計画して一度にできると良いと思う。

(委員)

- ・区の中でそういった動きをしていくことが大切である。

(委員)

- ・交通安全と防犯は対になるので取り組みやすい。

(事務局)

- ・高齢者には一つポイントになる。高校生についてはいかがか。

(委員)

- ・高校生は市内在住者でも各校に在学しているから大変である。

(委員)

- ・市内4校であれば、頼まれれば安協としていくことはできる。市外の高校は各校でやればカバーできるのではないかと。

(生活安全係)

- ・南安曇農業高校と豊科高校では交通安全教室を実施している。明科高校では講話などを開催しているようだ。穂高商業高校では自転車通学の生徒を対象に啓発や注意喚起を行っているようだ。

(委員)

- ・高校生の自転車マナーは気になる。狭い道いっぱいに自転車が並んで走っていることがある。学生は学校単位で交通安全について考える機会があるので良い。高齢者の方が心配である。

(委員)

- ・先ほどの教習所での交通安全教室について詳しく知りたい。

(生活安全係)

- ・日程が決まっているので、市から各地域へお声がけさせていただいている。
- ・そのほかに訪問型の教室もあるので活用いただきたい。
- ・地域からお声がけいただけるとありがたい。我々も各地域へ入っていくことを模索している。

(委員)

- ・訪問型の内容はどんなものか。

(生活安全係)

- ・高齢者を対象に寸劇を行うものである。楽しみながら勉強していただけるとありがたい。

(委員)

- ・敬老会などに取り入れることは可能か。

(生活安全係)

- ・30分ほど時間をいただければ可能である。是非活用いただき地域への一助になればありがたい。
- ・敬老会に限らず、子どもと高齢者が集まる機会などにも活用いただきたい。

(委員)

- ・こういった事業があることを知っている人が少ないので、周知も必要である。

(生活安全係)

- ・市としても様々な手法で市民に交通安全に関心を持っていただきたい。区長会に話をした経過もあるが、継続して周知していく必要がある。社協さんや老人クラブの方とも連携する方向で進めている。交通安全も各団体と行うことで相乗効果が生まれるのではないかと。

(委員)

- ・芝居は食いつきが良い。ただ話を聞くよりは関心が高まる。

(生活安全係)

- ・市と区の良い連携が見えてきた。他の団体との連携はいかがか。各団体で活動するよりも連携した方が効果的ではないかと。

(委員)

- ・各団体の活動が話題になればひろがりができるのではないかと。

(生活安全係)

- ・穂高地域では、中学校と区が協働して防災訓練を行っている、栗原委員から話があった。子どもと地域のつながりをつくる良い例ではないかと。

(委員)

- ・良い取り組みだが、学校の授業の一環であるために、平日開催であった。しかし、区の活動のほとんどは土日なので、そこのギャップを埋めることは大変である。中学生は部活や塾で土日は

忙しいようだ。運動会にも区内に子どもはいるものの、参加者は少なくなっている。

(委員)

・競技によっては、学年指定で選手を出す但那も難しく、違う学年の子を出す状況である。

(委員)

・穂高地域は区対抗の運動会はなく、区ごとに運動会を開催している。多くの人が競技に参加でき、楽しむことができる。

(事務局)

・区は人集めに長けているということで話があった。運動会の競技内容を見直し、年齢制限を設けずに誰でも参加できるようにすることで、人集めに苦勞しなくなったという区もある。また、運動会には多くの区民が参加するのでその機会に防災訓練を同時に開催しているという区もある。

(委員)

・高齢者の方が長けている競技を入れることも大事である。たくさん集まったときに行事を抱き合わせでやっていくことは、検討していきたい。防災訓練で簡易担架をつくる講習を受けた。そういうことを競技に入れることも楽しそうだ。

(委員)

・地域ごとに運動会を開催している地域では、そういった工夫は難しくなってしまう。地域の実情で工夫することが大切である。

(委員)

・防災訓練は役員ばかりになってしまうので、行事を抱き合わせると多くの方に参加してもらいやすい。

(生活安全係)

・良い例は、全市に広げていければよい。

(委員)

・区長会において市の支援策を活用していくことを周知したい。

(事務局)

・今回は、高齢者への支援をどうしていくかといったことをご協議いただいた。今あるものを活用していくといったことで交通安全の関係がまとまった。次回は防犯の関係を行いたい。

(2)閉会